

5April2020 Ps26:3-7、Mt27:24,25 《みんな「本当は厭だった」と言う》

I.

新型コロナ・ウィルスの感染拡大で、世の中は大きく混乱しています。医療は崩壊しかけています。教育は滞り始めています。経済は行き詰まり、今後、疲弊して行くでしょう。

医療の崩壊、経済の疲弊、教育の停滞…その他。それは信仰のあるなしに関係なく、誰にでも見えます。しかし同じ現実で；信仰者でなければ見えない、しかし信仰者には見えることがあります。

個人と行政が努力している、その対策を巡って。他人のやりかたに不満を持って裁き合う。そして自分自身をますます不幸にするか、またはこうした状況から愛を思い出して。不便な中でも自分の幸せに気づくか。私たちは、今、分かれ道に立っています。私たちにはそれが見えます。

感染予防のために。他人を押しつけてマスクを買い占め。鎧を何十にもまとうような仕方です。ウィルスの侵入を防ぎ。家に閉じこもって一日中コロナ関係のTVを見続ける。そうしたら感染のリスクは低いです。そういう生き方もあります。

たまたま中国の武漢に来ていたら、この騒ぎが始まって。ピーク時に帰国できたのに。敢えて残って報道し続けた。そういうジャーナリストがいました。感染のリスクは高くても、天職と信じたからです。そういう生き方もあります。生き方は、自分で自由に選べます。

では今、私たちはどう生きるべきでしょうか。密集、密接、密閉を避け、不要不急の外出を避け、手を良く洗って清潔に生きる。それだけでは足りません。キリスト教会は、その先を示します。

詩編の6節「主よ、わたしは手を洗って潔白を示し」。詩26編は、全体を読んでいただければ。ダビデは自分の潔白を信じ、その上手を洗いました。でもいくら洗っても綺麗にならなかった気がしなかったようです。

新約聖書の24節がピラトです。ピラトは、それ以上言っても無駄なばかりかかえって騒動が起こりそうなのを見て「水を持って来させ、群衆の前で手を洗」いました。

今日から受難週です。新約聖書の手を洗う場面は、イエスさまの処刑が、まさに決まった瞬間です。殺す側は、殺す罪を着ないために手を洗いました。

イエスさまの弟子の中には、貧困層から出た人もいました。そのせいか手を洗わずに食事をする人がいました。衛生上は無論、手を洗うべきです。

しかしちゃんとした生活をしている人たちが問題にしたのは衛生面だけではありません。信仰熱心な人にとっては、罪を清めてから食事をする…。ですから今で言えば食前感謝を祈るのと一緒です。宗教集団なのに祈らずに食事をするのかと批判しました。

それに対するイエスさまは。「お前たちも汚れてる」です。手さえ洗えば。あるいは食前感謝の祈りさえしておけば、神の前で大いばりで食事ができるのか。「お前も清くはないだろう」です。

どんなに手を洗っても綺麗にならない。どうしても穢れが落ちない。自分はどうしても清くはなれないという感覚は。人を惨めにします。人を不幸にします。

しかし「自分はどうしても清くはなれない」という感覚は。神を畏れつつ神の御前に出るためには大事です。悔い改めに導かれる感覚です。だからイエスさまは、正しいと思っている人たちの穢れを指摘します。

自分の信仰では自分は清くなれない。しかしキリストの犠牲によって、清くされた。それがキリスト教の信仰です。詩編はキリストを知らずに書かれました。詩編の詩人は自分の穢れを知る謙遜を持っていました。神を正しく畏れていました。しかし赦しを知りませんでした。

II.

今日から受難週です。新約聖書はイエスさまの処刑が決まった、まさにその瞬間です。そこに手を洗う場面が描かれています。殺す側は、殺す罪を着ないために手を洗いました。

殺したのはポンテオ・ピラトです。信仰告白で「ポンテオ・ピラトのもとに苦しみを受け」と私たちは告白します。ですからみなさんは、ポンテオ・ピラトを悪者だと感じているでしょうと思います。

現代の価値観で言えば、むしろ正しい人です。組織運営は「ガバメントからガバナンスへ」と言われる時代です。「合意形成が大切だ」という意味です。ピラトは絶対的な権力を握っていたのに。権力を振るいたい気持ちを抑えて、合意形成を目指した人です。

24 節から読んでいただきましたが、11 節から。きちんと被告人イエスに弁明の機会を与えました。その上で 18 節「人々がイエスを引き渡したのは、ねたみのためだ」と。鋭く真相を把握しました。

その上で 15 節「祭りの度ごとに、総督は民衆の希望する囚人を一人釈放することにしてきた」。いわゆる恩赦です。そんなことしなくても良いのですが。ユダヤを統治する上では有利です。

17 節「どちらを釈放してほしいのか。バラバ・イエスか。それともメシアといわれるイエスか」。16 節を見るとバラバは評判の囚人です。当然「イエスを赦せ」と言われるだろうと思ったのです。

さらに 19 節「一方、ピラトが裁判の席に着いているときに、妻から伝言があった。『あの正しい人に関係しないでください。その人のことで、わたしは昨夜、夢で随分苦しめられました』」。お連れ合いはイエスさまを許してほしかったようです。

裁判の席に奥さんが伝言を持って来て、それが歴史に残るとは。余程の愛妻家だったのでしょう。しかしピラトは正しい人です。公私混同はしません。愛妻を無視して審理に戻ります。

すると 20 節の最後「人々は『バラバを』と言った」。ピラトにとっては予想外でした。ピラトが真面目にイエスさまを尋問している間に。祭司長や長老が裏で「イエスを助けるのはおかしいよね」と。「そんなことしたら、まずいヨ、まずいヨ」と、コソコソやっ

たのです。

バラバを赦すのなら。22 節、ピラトはイエスをどうするかを聞きました。イエスは無実だからです。しかし群衆は「十字架につけろ」と熱狂します。

ピラトはなお正義を貫こうとします。23 節「いったいどんな悪事を働いたというのか」。でも群衆は、もはや聞く耳は持ちません。ますます激しく「十字架につけろ」と叫びます。

…からの、読んでいただいた 24 節です。それ以上言っても理屈は通せない。じゃあ死ぬのは赤の他人なのだから処刑すれば良いかと言うと。正義を通すことを、ピラトはまだ諦めません。

理屈で駄目ならパフォーマンスで最後の説得を試みます。水を持って来させ、群衆の前で手を洗って見せました。そして「この人の血について私には責任がない。お前たちの問題だ」けど「良いのだナ」と。

権力を振り回すことはしません。あくまでガバメントでなくガバナンスです。合意形成を目指して説得しました。それはもちろん身の安全を考えた面はあります。暴動を恐れたのです。

でも暴動に発展させないためには。もっと早くから強権を発動すれば良かったのです。逆らう者を権力で押さえ込めば、無実のイエスを殺す羽目にはなりません。ただ民衆の良識を信じれば。まさかイエスを殺せとなるとは思いませんでした。

「良いのかヨ、俺は知らねエぞ」という意味で。群衆の前で手を洗って見せました。すると 25 節、民はこぞって「その血の責任は、我々と子孫にある」と。「どうしても殺せ」です。それでやむなく処刑することにしました。本当は厭だったのです。

III.

最初、民衆の良識を信じて民意を問いました。そうしたら群衆は熱狂して。権力者でも押し戻せない事態になって仕舞いました。ピラトに落ち度があったとすれば、群集心理を過小評価していたことだけです。

それなのに世界の教会は。異端でなければ、どこも使徒信条を告白します。「ポンテオ・ピラトのもとに苦しみを受け」と。2000 年後の現代でもピラトを悪く言います。それで私たち後のクリスチャンは。自分は「ピラトのような悪人ではない」と思っています。

本当は厭だった。本当は殺したくなかった。本当は正義を目指していた。それなりに頑張った。精一杯にやった。それは、そうです。だけど最後は流されて。我が身可愛さに知らんぷりをした。それでも自分では手をくさなかつたのだから、私は潔白だ。

詩編の詩人も同じです。ずいぶん頑張った。だけど世の中の大きな力には抗えない。そんなの誰でも一緒です。自分は正しいこともやっている。だから私は潔白だ。神さまの前に出ても恥ずかしくない。

詩編の詩人は、最初、そう言いたかったのです。「主よ、わたしは手を洗って潔白を示し／あなたの祭壇を廻り／感謝の歌声を響かせ」ています。わたしは神を慕っています。そう訴えますが…。読んでいただいた先では様子が変わります。

9 節「わたしの魂を罪ある者の魂と共に…取り上げないでください」と。どんなに手を洗っても、どうしても穢れが落ちた気がしないのです。11 節では「わたしを憐れみ、贖ってください」と懇願します。自分が清くはなれないように思えてくるのです。

「自分はどうしても清くはなれない」という感覚は。神を畏れつつ神の御前に出るためには大事です。しかし人を惨めにし、不幸にします。この罪を贖うためにキリストが十字架で死んでくださった…というのが、私たちの信仰です。

ピラトは有能で優秀な為政者でした。だからユダヤ総督になれました。それでいて謙遜です。キリスト教会の作り上げたフィクションとは違って謙遜だから成功しました。ヘロデ王や、大祭司カヤパ、アンナスの意見も聴取しました。さらに民衆の声にも耳を傾けました。

ただ自分の生き方を、神さまの前に広げて、神に裁いていただくという思いはありませんでした。その意味でのみ傲慢でした。傲慢だから不幸です。どんなに成功しても。自分のやって来たことに納得できないのです。手を洗えども洗えども。自分の手は、穢れたままなのです。

人を、この罪と罰から救うために、キリストは十字架におかかりになりました。私たちは、自分をピラトと同じ罪人だと思ふのなら。キリストは、私たちのために十字架におかかりになりました。

自分の力で自分を救うことは出来ないと思ふのなら。そんな私どものためにキリストは十字架におかかりになりました。だから罪を赦されました。ピラトのように人を殺しても。なお赦されます。

IV.

献身的であることと、無制限、無計画であることとは違います。今、南ヨーロッパのお医者さん、看護師さんがたは。目の前の、救おうと思えば救えるかもしれない。それをあえて助けないことがあります。

だって自分が感染したら、将来救えるだろう 100 人を救えなくなります。助かる見込みの少ない目の前の人にエネルギーを注いだら。助かるはずだった他の人を殺すことになるかもしれません。

だからお医者さんがたは、誰を助けるか、という選択を迫られています。言い換えれば、誰を殺すか判断します。信仰がなければ。そもそも仕事をやめたくなるだろうと思います。

それは平塚にいても分かります。ドイツのメルケル首相は、スーパーのレジの人に対して「命がけの奉仕に感謝します」と言っていました。レジ打ちなら私たちだってやります。

今の務めを、神から与えられた尊い務めだと思わないなら。人は絶対に幸せにはなれません。今の務めが天職でないなら。看護師さんは、政府に対しても病院に対しても患者に対しても不満しかわきません。レジの人は、お店とお客に腹が立ちます。

今の務めを神から与えられた尊い務めだと思って初めて、私たちは精一杯に生きることが出来ます。しかし精一杯に頑張ること、献身的であることと無計画とは違います。目の

前で苦しむ人を見殺しにすることもあります。だって私たちは全能の神ではないからです。

見殺しにすれば、人は批判するかもしれません。助けても。助けたせいで感染のリスクが広がったと批判されかねない時代です。どういう選択が本当に正しかったか。正解は、天国に帰るまで隠されています。

たとえ間違った選択であっても。キリストの故に赦されている。私たちは、そう信じます。だから信じた通りに生きられるのです。祈って。判断が間違っていたらご免なさい…。しかし信じた通りに振る舞うのです。それが私たちクリスチャンです。

医療の崩壊、経済の疲弊、教育の停滞…その他。それは誰でも分かります。私たち信仰者だけに分かることがあります。不満を抱いて裁き合い、自分をますます不幸にするか。それとも困難だから、命を超えた尊いものを思い出して。それで信じた通りを行なう自分を取り戻すか。

人は今、その分かれ道に立っています。信仰がなくても愛のために生きる人は大勢あります。ただ分かれ道に立っていることを知るか知らないか。それが信仰者とそうでない人の違いです。

知っている分、私たちは正しい選択が出来ます。私たちが、神に愛され、救いの初穂として神から選ばれているからです。世で与えられている務めを、祈って、全うしてください。